

〔資料〕 CAPAS 能力検査 I・II の再検討

東京矯正管区 大西 美加
矯正協会附属中央研究所 大川 力
原島 實
齋藤 俊一
出口 保行
井部 文哉

1 はじめに

CAPAS 能力検査（以後 CAPAS という）は、新田中 B 式知能検査（3B）にかわる知的能力測定検査として作られた。田中 B 式知能検査は、本来、心身ともに成長中である児童生徒について、その知的能力の発達状態を測定する目的で作られたものであり、成人は測定対象としていなかった。また、この検査では受刑者のかなりの者が IQ 55 以下の領域にひとまとめされてしまい、個々の受刑者の分別が困難になってしまう。そこで、受刑者の能力に合った問題を作成すると共に、心理技官の配置がない行刑施設でも検査結果の理解や実務への応用を誤りなくできるようにという意図から、コンピュータ採点による成人受刑者用能力検査として CAPAS が開発され、昭和 63 年以降実用化されている。

しかし、上記開発時の標準化が比較的少数のデータ（996 名）によってなされたことから、より多数のデータにより標準化の安全性を検証する必要が開発当初から言われてきた。同検査が実用化されて 7 年が経過し、全国行刑施設への普及も進み、十分なデータ数が確保できることから、平成 5 年度及び同 6 年度のテスト施行データを収集し、その分析結果

をまとめたものが本稿である。

ここで、検査の構成について概説する。

検査は、集団で一斉実施される〈能力検査 I〉と個別に実施される〈能力検査 II〉の二部構成である。各々の下位検査項目は、以下に示すような目的と方法によっている。

〈CAPAS 能力検査 I〉

作業適性を測定する

けんさ 1（＋記入）

：大小ある○の中にちょうど収まるように＋記号を記入する。

けんさ 2（線入れ）

：重ねた相似図形の間に、はみ出さないよう同じ図形を一筆書きで入れる。

けんさ 3（線繋ぎ）

：小さい数字から大きい数字に向かって 1 から順番に直線を引いていく。

思考の流暢さを図る

けんさ 4（連想）

：キーワードから連想した言葉を種々、たくさん書く。

思考判断力を測定する

けんさ 5（誤り探し）

：二つの図を比べて異なっているところを探す。

けんさ6 (仲間外れ)

: 複数の数字, 単語等からなる回答群の中から一つだけ異なる種類のものを探す。

けんさ7 (鏡映弁別)

: 鏡映関係にある2セットの数字, 単語等を比べ, 同否を判断する。

けんさ8 (加算置換)

: 2つの図形の組み合わせからなる問題図形を, 約束に従い数字変換し計算する。

けんさ9 (図系列)

: 提示してある3つの図の規則性から, 問題となる一つの図形を推理する。

<CAPAS 能力検査II>

基礎学力をはかる

もんだい1 (国語): 読み書き, 読解力等

もんだい2 (計算): 単純な四則計算

もんだい3 (単語): 言葉の意味

もんだい4 (算数応用): 算数の応用問題

もんだい5 (一般常識)

: 理科, 社会等を含む常識問題

社会的問題解決能力をはかる

もんだい6 (生起順)

: 行動を起こす順番を付けていく。

もんだい7 (手段)

: ある障害状況に対処する方法を, 回答群の中から一番良いと思うものから順に3つ選ぶ。

これらの結果は, まとめて偏差値「能力SS」として数値化される。それを基に下・中の下・中・中の上・上という5段階の「総合評定」が出される。これには, 参考値として新田中B式との相関から算出される「IQ相当値」の項目も設けられている。

「能力SS」については, さらに言語面・動作面・機敏さの3つの下位尺度にまとめられ, 数値及びプロフィールで表示されるよう

になっている。これには年齢の要因を反映させた修正値も併せて表示される。これらをまとめて所見にしたものが「総合所見」である。

そのほかエラーの因子として, (1)素早さが要求される機械的作業において課題遂行の仕方が困難なために生じる「粗雑さ」と, (2)正答がはっきりわからないままいい加減に回答するために生じる「判断不適切」の項目が設けられ, その発生の程度が示されるようになっている。これらは, 「作業指定上の参考事項」「要注意作業種目」等の参考項目を導き出す元値ともなっている。

2 目的

最近2年間のCAPAS施行データと検査開発時の基礎資料とを比較・検討し, 開発当時の標準化の安全性を検証する。

3 方法

(1) 対象者

データの収集が可能であった63の行刑施設に収容されていた者のうち, 平成5年から6年の間にCAPASを実施した者を対象とした。その結果, 26,838名分のCAPAS実施結果のデータが得られた。一部データが欠損していたものもあったが, 残っている部分をなるべく生かそうという意図から, ケースごと削除することはせず, 欠損値として扱うこととした。したがって, 以下に記す各分析において用いた対象者数(表ではN)は, 各下位検査により異なっている。

対象者の性別と年齢は以下のとおりであった。(パーセンテージについては, 小数点第2位以下を四捨五入した。)

性別	男性	25,947名	96.7%
	女性	882名	3.3%
	不明	9名	0.0%
年齢	25歳以下	4,623名	17.2%

26～35 歳	7,368 名	27.5%
36～45 歳	7,009 名	26.1%
46 歳以上	7,829 名	29.2%
不 明	9 名	0.0%

4 結果と考察

各下位検査項目における平均正答得点の分布を調べたところ、ほとんどの項目で正規分布することが認められた。また信頼性係数（アルファ係数）は、前回の .8517 に対し、今回も .8524 の高水準を保っている。特に今回のデータ数が 2 万を越える数字であることを考慮すると、この数値は極めて高く、CAPAS 能力検査の信頼性の高さが示されているといえよう。

以下開発時の数字と併せて表のかたちで示しながら各分析の結果を比較検討していく。

(1) 平均点と標準偏差からの検討

ア) 正答得点の平均と標準偏差

表 1 を見ると、平均正答得点は全般にやや下がり気味ではあるが開発時と比べて大きい

(2) 手続

テスト施行データは施設ごとにフロッピーディスクで送ってもらい、当研究所で一つに結合した後、統計的な分析をした。

分析方法については、標準化した際の手順に沿って処理することとした。すなわち、基本的な記述統計の算出、下位尺度を構成する因子の分析、年齢別・性別の分析及びエラー要因の分析である。その上で、開発時と今回の分析結果を比較検討した。

表 1 正答得点の平均値と標準偏差

下位検査	S63		H5・6	
	平均	(SD)	平均	(SD)
①+記入	33.40	(11.05)	30.39	(12.14) **
②線入れ	9.25	(3.56)	9.31	(3.44)
③線繋ぎ	17.75	(5.96)	17.53	(6.56)
④連想数	15.92	(5.41)	15.80	(6.16)
⑤連範囲	6.27	(1.79)	5.98	(1.88) **
⑥誤探し	11.93	(4.09)	11.72	(3.77)
⑦仲間外	18.94	(4.83)	17.88	(5.33) **
⑧鏡弁別	17.64	(5.42)	16.68	(5.36) **
⑨加算値	33.64	(14.36)	29.40	(13.56) **
⑩図系列	6.32	(2.89)	6.09	(3.01) *
⑪国語	6.82	(2.68)	6.59	(2.87) **
国語 1	4.97	(2.07)	4.86	(2.22)
国語 2	1.85	(0.95)	1.73	(0.96) **
⑫算数	4.95	(2.55)	4.60	(2.70) **
算数 1	3.26	(1.35)	2.99	(1.47) **
算数 2	1.70	(1.43)	1.60	(1.46) *
⑬常識	4.61	(1.92)	4.29	(2.00) **
⑭社会	9.11	(3.42)	8.65	(3.82) **
生起順	2.78	(1.09)	2.66	(1.21) **
手段	6.33	(2.82)	5.98	(3.09) **

(注) 1 S63 の N は 996, H5・6 の N は各下位検査ごとに 22,718～26,838 の範囲で異なる。

2 * は 5% 水準で, ** は 1% 水準で有意差があることを表す。

3 下位検査部分結合前・後両方の値を示してある。

4 表内の数値は、小数点第三位以下を四捨五入した値である。以下の表も全てこの例による。

表2-1 S63データの年齢別正答得点の平均値と標準偏差

	25歳以下		26~35歳		36~45歳		46歳以上	
	平均	S D	平均	S D	平均	S D	平均	S D
①+記入	37.5	10.9	36.4	11.0	31.8	9.8	29.8	10.9
②線入れ	11.2	3.6	10.9	3.5	8.9	2.9	7.3	2.9
③線繋ぎ	20.7	5.5	20.3	5.7	18.9	4.9	13.7	5.1
④連想数	9.6	3.9	10.4	3.6	9.8	4.4	9.0	4.0
⑤連範囲	5.2	1.5	5.6	1.6	5.4	1.7	5.1	1.7
⑥誤探し	13.7	3.9	13.5	4.0	11.9	3.7	9.9	3.5
⑦仲間外	20.1	3.9	19.7	4.2	18.0	3.9	15.4	5.0
⑧鏡弁別	21.4	4.7	19.8	4.6	16.8	4.7	14.7	5.0
⑨加算値	41.2	13.2	39.4	13.6	32.3	12.9	25.6	12.7
⑩図系列	8.0	2.6	7.5	2.7	6.2	2.5	4.8	2.5
⑪国語	7.4	2.3	7.4	2.3	7.0	2.6	5.9	2.9
⑫算数	6.0	2.4	5.6	2.5	4.7	2.4	4.0	2.4
⑬常識	4.3	1.8	4.7	1.9	4.7	1.9	4.6	2.0
⑭社会	9.1	3.2	9.6	3.2	9.5	3.3	8.5	3.6
	(N=220)		(N=217)		(N=346)		(N=386)	

(注) 年齢をコントロールして再テストした結果であるため、N計は表1、3とは異なる。表5も同様。

表2-2 H5・6データの年齢別正答得点の平均値と標準偏差

	25歳以下		26~35歳		36~45歳		46歳以上	
	平均	S D	平均	S D	平均	S D	平均	S D
①+記入	31.9	10.5	34.1	12.3	30.5	11.8	25.8	11.8
②線入れ	10.0	3.2	10.6	3.3	9.4	3.3	7.6	3.1
③線繋ぎ	18.9	5.9	20.3	6.0	18.0	6.1	13.7	6.1
④連想数	17.3	5.7	17.6	6.0	15.5	5.9	13.4	6.0
⑤連範囲	6.4	1.7	6.4	1.9	5.9	1.8	5.3	1.9
⑥誤探し	13.6	3.0	13.3	3.0	11.7	3.3	9.1	3.7
⑦仲間外	20.0	4.3	19.7	4.4	18.0	4.7	14.8	5.8
⑧鏡弁別	19.5	4.5	18.7	4.5	16.5	4.7	13.2	5.2
⑨加算値	36.4	11.9	34.7	12.1	28.8	12.4	20.8	11.9
⑩図系列	7.7	2.7	7.3	2.7	5.9	2.7	4.1	2.6
⑪国語	7.2	2.2	7.1	2.5	6.7	2.9	5.6	3.3
⑫算数	5.4	2.5	5.3	2.6	4.5	2.7	3.5	2.5
⑬常識	4.0	1.8	4.5	1.8	4.5	2.0	4.2	2.2
⑭社会	8.9	3.4	9.2	3.6	8.9	3.8	7.7	4.2
	(N=4238)		(N=6103)		(N=5870)		(N=6501)	

(注) 表中のNは、全下位検査に有効であった対象者数を示す参考値である。

数値の変動はない。「+記入」「加算値」では、他と比べて一見得点の低下が目立つようであるが、両項目はもともと最大得点と最小得点の幅が広く設定されており、それに伴って差も大きく出やすい点が指摘できる。母平均値の差の検定においては、前記の2つの下位検査項目のほか多くの項目で有意な差が認められているが、一部項目を除いては母分散は等質ではなく、むしろ調査対象となる母集団の質の違いが示されていると考えられる。

一方、開発時とは調査対象者の数が大きく異なってにもかかわらず「線入れ」「線繋ぎ」「連想数」「誤り探し」等、有意な差が認められない下位検査もあり、これらについては、むしろ調査対象者の質の変化に左右されない安定性の高い項目であることが示唆された。

イ) 年齢別の検討

能力の経年変化を分析するにあたって、前回は、25歳以下、26～35歳、36～45歳、46歳以上という年齢区分を設けている。各年齢区分ごとの正答得点の平均と標準偏差は、表2のとおりである。

開発時の標準化に用いた資料では、下位検査の種類により程度の差はあるものの、いずれも加齢と得点との間に負の相関、すなわち下降傾向が見られた。下降型については、曲

線型と見なす根拠も直線型を否定する根拠も得られなかったことから、直線型に下降すると仮定し、「年齢修正値」を算出している。

今回得られた資料では、「+記入」「線入れ」「線繋ぎ」といった作業適性を測定する意図で設けられた項目及び「社会（生起順と手段の項目をまとめたもの）」において、25歳以下の区分と26～35歳の区分とで若干の逆転が起こっているものの、他の項目では概ね前回の分析結果を支持する結果となった。

次に、総合的な能力評定への年齢の影響を見る。これは、開発時と同様に、「能力SS」を算出する元値であり、より値が大きく比較しやすい「総合得点」によって比較した。総合得点は、単純加算した各下位検査（部分結合後）のZ得点を、平均100、標準偏差15となるように標準化して得た。（連想数、連想範囲については今回も除外した。）これを年齢別・性別に開発時との比較表にしたものが表3である。さらに、各年齢ごとの総合得点の平均値を図1に示す。

表3を見ると、25歳以下の区分と26～40歳の区分との差は前回に比してやや狭まっているものの、年齢増加に比例して得点は下がっている。開発時の資料との差は、表2の一部下位検査において見られた25歳以下と26～

表3 年齢別・性別の総合得点の平均値

	S63	H5・6
全体	100.00 (N)	100.00 (N)
25歳以下	107.28 (206)	106.07 (4,632)
26～40歳	104.02 (366)	105.16 (10,362)
41歳以上	93.00 (424)	93.11 (11,844)
男	100.49 (736)	100.05 (25,947)
女	98.63 (260)	98.93 (882)

図1 年齢別・総合得点の平均値

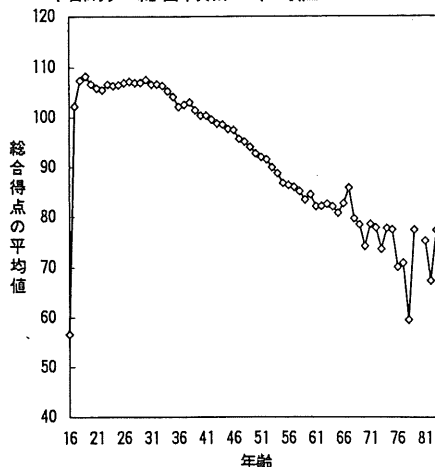


表4 性別正答得点と標準偏差

	男		女	
	平均	(SD)	平均	(SD)
①+記入	30.4	(12.2)	31.3	(11.0) *
②線入れ	9.4	(3.4)	8.1	(3.4) **
③線繋ぎ	17.6	(6.5)	15.7	(6.5) **
④連想数	15.7	(6.2)	17.3	(6.1) **
⑤連範囲	6.0	(1.9)	6.2	(1.7) **
⑥誤探し	11.7	(3.8)	12.1	(4.0) **
⑦仲間外	17.9	(5.3)	18.4	(5.3) **
⑧鏡弁別	16.7	(5.3)	16.6	(5.7)
⑨加算値	29.5	(13.5)	28.0	(14.0) **
⑩図系列	6.1	(3.0)	6.2	(3.2)
⑪国語	6.6	(2.9)	6.6	(2.8)
⑫算数	4.6	(2.7)	4.4	(2.7) *
⑬常識	4.3	(2.0)	3.8	(1.9) **
⑭社会	8.6	(3.8)	9.4	(3.8) **
	(N=21,841)		(N=871)	

(注) * は5%水準で, ** は1%水準で有意差があることを表す。

35歳での値の逆転現象が影響したものであろう。また、図1を見ると、30歳代前半までは頭打ちの状態を横ばいしているが、その後は年齢の増加に反比例して得点が下降している。さらに、下降傾向が直線型であることを否定する根拠は今回も得られなかった。

ウ) 性差の検討

表3によれば、開発時と今回のデータに大きな性差は認められていない。ただし、開発時には性差についてあまり詳しい検討はなされておらず、また男女間の標本数の差が大きいことから、男女のデータをまとめて処理することの可否を確認する意味でも、もう少し詳しく資料を検討する必要がある。そこで各下位検査ごとに男女間の母平均値の差の検定を行った。この結果を表4に示す。

ここでは、多くの項目で男女間の平均正答得点に有意な差があるとされ、性別による偏りの存在が示唆されている。しかし、全体的な能力評定に影響を及ぼすほどではない。また、母分散はほとんどの下位検査で等しかつ

た。男女のデータをまとめて処理することは十分可能と考えられる。

(2) 因子分析による検討

ア) 正答得点からの分析

開発時、下位検査項目の正答得点から抽出した能力因子は、①動作面の能力を表す因子、②言語面の能力を表す因子、③素早さ・機敏さを表す因子と解釈され命名されている。本研究において開発時と同様の手法（主因子法により3因子を抽出後、斜交回転をする）で因子抽出し、比較した表を表5-1に示す。また、属性の要因を検討するため、因子得点を平均100標準偏差15に標準化した数値を表5-2に示す。

表5-1からわかるように、因子分析の結果は、開発時とは第2因子と第3因子が逆転している。しかし、それらを構成する下位検査は開発時の分析と一致しており、「動作面」「言語面」「機敏さ」の3つの因子から説明できる（累積寄与率73%）ことが示された。以下に各因子について詳しく見てみる。

表 5-1 斜交回転後の因子負荷量

	第 1 因子 (動作面)	S63 第 2 因子 (言語面)	第 3 因子 (機敏さ)	第 1 因子 (動作面)	H 5・6 第 2 因子 (機敏さ)	第 3 因子 (言語面)
①+記入	.1415	.1147	.5976	-.0289	.7197	.0199
②線入れ	.1693	.1497	.7945	.0453	.8566	.0026
③線繋ぎ	.4737	.2224	.3374	.4270	.4119	.0483
④誤探し	.5179	.1702	.2342	.7772	.0656	-.0558
⑤仲間外	.5634	.4387	.1592	.6133	.0217	.2823
⑥鏡弁別	.6669	.1955	.2155	.7935	.0722	-.0374
⑦加算値	.6937	.2451	.1434	.8382	-.0162	.0501
⑧図系列	.5666	.3389	.1646	.7285	-.0317	.1169
⑨国語	.2686	.7087	.1715	.0903	.0160	.7870
⑩算数	.3635	.6074	.1822	.2480	-.0181	.6262
⑪常識	.0752	.7258	.0566	-.1260	.0491	.7848
⑫社会	.1652	.5672	.0855	.1304	-.0129	.6080

①第 1 因子：作業適性の検査を除いた＜能力検査 I＞の下位検査がこの因子と関係が深く、因子を構成する下位検査項目が開発時と全く同じであることから、「動作面」の能力に関する因子と命名できる。年齢が増すにつれて因子得点の平均値が下降する傾向は、今回も確認された。

②第 2 因子：作業適性の検査と最も関係が深く、因子を構成する下位検査も開発時と同じであることから、「機敏さ」の能力に関する因子と命名できる。

第 1 因子との相関については開発時にも指摘されているが、開発時が .337 に対して、今回は .61 と比較的高くなっている。また、第 1 因子と同様に因子得点が年齢の増加につれて下降を示すといった特徴が確認されており、この因子も動作性の能力に関連していることが示唆されている。ただし、因子を構成する下位検査の作業の単純さから、第 1 因子より低次の認知的操作に関連した動作性の能力因子と考えられる。その点で第 1 因子とは性質を異にしているとの指摘は、今回のデータでも確認された。

③第 3 因子：＜能力検査 II＞の各下位検査及び＜能力検査 I＞の「仲間外れ」の検査が

この因子と関係が深く、因子を構成する下位検査項目が開発時と全く同じであることから、「言語面」の能力に関する因子と命名できる。

第 1 因子と関係の深い「仲間外れ」の検査はこの因子ともやや関係しているが、読書字能力を必要とする点で第 1 因子を構成する他の下位検査とは異なる性格を持っており、これを反映したものと考えられる。開発時 .4387 であった因子負荷量が今回は .2823 とやや低くなっているが、この因子と関係の薄いその他の下位検査の因子負荷量も同じ程度に低くなっており、「仲間外れ」の検査に特有の変化を示唆するものではない。

次に、各因子ごとの属性要因について見る。

表 5-2 からは年齢の増加とともに因子得点の平均値が上昇する傾向が認められる。これは、開発時の分析結果（「年齢が高くなっても低下を示さない」とはやや異なっている。しかし、「言語性能力は 60 歳頃がピークであり、それ以降低下に転ずるが、70 代までは低下はわずかであり、80 代になって初めて低下が大きくなる」（1984, 中里）といった最近の老人知能の研究における知見とは一致している。今回の資料によって、開発時に設けられた能力の経年変化に関する仮定

表5-2 標準化した因子得点による各属性ごとの比較表

	S63		H5・6	
	平均	(SD)	平均	(SD)
＜動作面の能力を表す因子＞				
全 体	100.00	15.00	100.00	15.00
25歳以下	110.91	11.68	113.38	16.50**
26～40歳	104.26	13.59	104.36	17.32
41歳以上	91.03	12.20	90.42	17.49
男	100.04	15.21	99.85	19.44
女	99.89	14.39	103.88	18.92**
＜言語面の能力を表す因子＞				
全 体	100.00	15.00	100.00	15.00
25歳以下	99.54	13.40	94.66	14.67**
26～40歳	101.28	14.46	98.67	16.21**
41歳以上	99.12	16.08	103.47	17.73**
男	101.58	—	100.04	17.02
女	95.54	—	99.04	15.31
＜機敏さを表す因子＞				
全 体	100.00	15.00	100.00	15.00
25歳以下	108.95	14.42	97.19	15.38**
26～40歳	103.09	14.32	102.65	16.48
41歳以上	92.98	12.41	98.89	15.28**
男	99.75	15.73	100.25	15.92
女	100.72	12.68	93.84	14.26**

(注) 1 S63: 25歳以下 (N=220) H6: 25歳以下 (N= 4,238)
 26～40歳 (N=434) 26～40歳 (N= 8,632)
 41歳以上 (N=515) 41歳以上 (N= 9,842)
 男 (N=833) 男 (N=21,841)
 女 (N=314) 女 (N= 871)

2 ** は1%水準で有意差があることを表す。

が適切なものであったことを確認することができた。

性別については、特に女性において開発時と今回のデータ間に統計的に有意な差の存在が認められている。一見しても、「動作面」「機敏さ」の因子において差のなかったものが、女性の方が高くなったり（運動面）、男性の方が高くなったり（機敏さ）していること、「言語面」の因子において男性の方が高かったものが差がなくなったことなど、開発時の分析結果とは異なる傾向が示されている。開発時も今回も女性のデータは少ないので、何らかの偏りの存在も考えられるが、女性母

集団の質的变化も考えなければならない要因である。

イ) 誤数からの分析

開発時、時間制限のある作業課題からなる＜能力検査I＞（けんさ4は誤数が生じないため除外）8下位検査の誤数から、共通するエラー因子として、①課題遂行の粗雑さを表す因子、②判断の不適切さを表す因子の2因子が抽出された。今回も、正答得点の分析と同様の手法により因子分析した結果を、開発時との比較表にして表6に示す。

今回の分析でも抽出された因子は2因子である。第1因子で負荷量の高い下位検査は、

表 6-1 エラー数の平均値と標準偏差

下位検査	S63		H5・6	
	平均	(SD)	平均	(SD)
①+記入	1.90	(5.02)	2.54	(6.19) **
②線入れ	1.01	(1.93)	0.64	(1.52) **
③線繋ぎ	1.04	(2.70)	0.60	(1.75) **
④誤探し	0.24	(0.97)	0.06	(0.37) **
⑤仲間外	1.52	(1.76)	1.35	(1.67) **
⑥鏡弁別	1.63	(1.89)	1.30	(1.69) **
⑦加算値	1.57	(3.60)	1.19	(2.76) **
⑧図系列	2.37	(2.06)	1.96	(1.89) **

(注) 1 S63 データのNは 996, H6 データのNは各下位検査により 26,837~26,838 の範囲で異なる。

2 ** は 1%水準で有意差があることを表す。

表 6-2 回転後の因子負荷量

	S63		H5・6	
	第1因子 (粗雑さ)	第2因子 (判断不適切)	第1因子 (判断不適切)	第2因子 (粗雑さ)
①+記入	-.5443	.0634	-.0079	-.5836
②線入れ	-.8624	.0993	-.0352	-.7595
③線繋ぎ	-.1836	.1503	.0314	-.3593
④誤探し	-.0923	-.0231	.0699	-.0170
⑤仲間外	-.0152	.4466	.4364	.0409
⑥鏡弁別	-.0132	.5014	.5369	-.0062
⑦加算値	-.0680	.3373	.4162	-.0059
⑧図系列	.0294	.5656	.5436	.0299

(注) S63 データのNは 996, H6 データのNは各下位検査により 26,837~26,838 の範囲で異なる

「仲間外れ」「鏡映弁別」「加算置換」「図形列」等の複雑な思考操作を必要とする項目である。開発時は第1因子で負荷量の高かった項目と同じであり、判断の不適切さを表す因子と命名できる。一方、第2因子で負荷量の高い下位検査は、「+記入」「線入れ」等の機敏性を要する項目である。これらは開発時の第2因子で負荷量の高かった項目と同じであり、課題遂行の粗雑さを表す因子と考えられる。

開発時とは因子の構造が逆転しているもの

の、各因子の内部構造は変わっていない。

5 まとめ

開発時と同様の分析を行い、ほぼ同じ結果が得られた。一部、基本的な数値に変化はあったものの、母集団の年齢等構造自体が開発時とは変わってきていること、にもかかわらず各因子構造や経年変化のパターンが担保されていることなどを考えあわせると、むしろCAPASが能力検査として適当かつ適切であることを示していると考えられる。

一部基本的な数値の入れ替えが望まれる部分もあるが、構成能力検査として全面改訂が必要なほどではなく、部分的な数値の入れ替えを行う程度の修正で十分今後の実用に耐えられる検査であるといえる。

エラーの要因については、「作業指定上の参考事項」「要注意作業種目」など、所内生活に重要な役割を果たしうる情報と密接に関わっているものであり、今後もより詳細な分析を行う必要がある。

参考文献

- (財)矯正協会, 1988, CAPAS JOURNAL NO.1, p 6-13
法務大臣官房司法法制調査部調査統計課編, 1995.6, 第96矯正統計年報I, p 72-73
近藤日出夫/遠藤隆行, 1988, 能力検査の因子分析による検討, 犯罪心理学研究 26 巻特別号, p 102-103
井部文哉/奥村晋, 能力検査(CAPAS)の作成過程, 犯罪心理学研究 26 巻特別号, p 100-101
森敏昭/吉田寿夫, 1990, 心理学のためのデータ解析テクニカルブック, 北大路書房
中里克治, 1984, 老年期における知能と加齢, 心理学評論 Vol. 27 No 3, p 247-259